

序

近年、医学或は広く生物学の分野での電顕の応用は益々盛んになつてきている。電顕の持つ役割は、従来の光顕的形態学を、macromolecule のレベル迄推進める事により、molecule のレベルでの生化学と結び付ける所にあり、皮膚の構造と機能を併せて理解して行く上に不可欠の方法という事ができる。

従つて皮膚科領域においても、ここ数年来電顕に対する関心は急速に高まつてきており、これ迄にも総会や連合地方会等を機としては、これに興味を持つ人々の間で、何回か集会、討議が行われ、研究の進歩を促がしてきた。そして今や電顕は、自らそれを扱うと否にかかわらず、もつと広く一般に皮膚科学を学ぶ人々に親しまれるべき段階迄きていると思われる。

しかしながら、何といつても電顕は従来吾々の馴れ親しんできた光顕的形態学とは、その見る像も、問題とする点も異つており、ある程度の基本的な知識がなくては取つき難い。

幸い昭和40年、金沢での総会で、会頭福代教授は皮膚の電顕像を総会シンポジウムとして企画され、その成果は皮膚科の臨床の特集号として、藤浪、橋本、清寺3教授の編集の下にまとめられた。これは単なる論文集ではなく、編集者の周到な企画とご努力により、現在本邦で皮膚の電顕に関する好個唯一の入門書並に参考書としての役割を果たしている。

偶々昭和41年、第30回東部連合地方会を吾々が開催する際、その行事として再び電顕をシンポジウムとして企画した。唯金沢の総会では正常の皮膚の電顕像が取上げられたのに対し、今度は病的な皮膚の電顕像を問題として見たのである。幸い東部のみならず中部、西部からも多数の講師の方々のご参加を得て、終始熱心な討議が行われ所期の成果を挙げ得た事は感謝に堪えない。その記録は学会誌には抄録として載録される事になつたがやはり写真も入れてきちんとした形にまとめて置けたならば、今日皮膚科学の進歩の為に何分かの役に立つのではなかろうかと考えていた所、幸に「臨床皮膚科」で特集号として公表して頂ける事になつた。誠に喜びに堪えない。ここにこのシンポジウムの座長でもあり、またこの編集責任者でもある橋本教授のご尽力を多とすると共に、吾々の希望をかなえて下さつた「臨床皮膚科」関係の方々に厚く感謝の意を表する次第である。

昭和42年2月 於東京

順天堂大学教授 宮崎 寛明